

独特の開花で紅葉もする水田の「その他一年生広葉雑草」,
チョウジタデ

森田 弘彦

水稲用新除草剤の適用性試験での除草効果の取りまとめ書式には「その他一年生広葉」の欄があり、試験区でこの数字が大きいと成績検討会などで、「具体的な種類は？」との質問が飛ぶ。これに対して、アゼナ、ミゾハコベ、ホソバヒメミソハギなどと説明される場合が多く、試験担当場所によってはこれらを別の欄に記入して下さることもある。アカバナ科チョウジタデ (*Ludwigia epilobioides* Maxim. : 図-1) もこうした場ではしばしば登場するものの、単独の欄に記入されることはまずない。雑草図鑑には「水田や、あぜ、湿地などに生育する。春から夏にかけて、水田にかなり多く発生する害草である。特に秋の刈取り頃にはよく目立つ草である。(沼田 真・吉沢長人 「新版・日本原色雑草図鑑」, 1975)」とあるように全国に普遍的に発生するが、重要視されることはあまりない。

移植水田にも発生するが、イネの播種時や苗立ち後に除草剤処理された湛水直播水田ではチョウジタデが特異的に残ることが時々見られる(図-2)。こうした場合には中・後期除草剤の処理が適正であれば、仮にあとから発生しても生育が余り進ま

ない状態にとどまる(図-3-A)が、それぞれの剤の効果が十分に発揮されない場合にはイネの草高を超えるほどに繁茂する(図-3-B)。花は黄色の4または5弁花で、1つの葉腋から数個の花が時期をおいて着き、果実(さく果)には独特の内果皮にモナカのように包まれた種子が20-80(平均値:44)粒含まれている(図-1-B-E)。したがって、「種子は果実に4~5個あり(草薙得一・皆川健次郎 「原色 雑草の診断」, 1986)」の記述は誤りである。湛水条件では白色の気根を出す特徴もある(図-1-F, G)。

チョウジタデの幼植物はやや紅紫色を帯び、「第1対生葉は・・・, 第2対生葉は・・・, 第3葉・・・(笠原安夫 「日本雑草図説」, 1968)」とあるように、子葉の次の2節が対生葉となる独特の性質がある(図-4-A)が、中には3節まで対生葉となる個体もある(図-4-B)。除草剤の適用での広葉雑草の生育段階は、アゼナなどでは対生葉の対の数で、ヤナギタデなどでは互生葉の枚数で示されるので、両方が混在するチョウジタデでは幼植物の生育段階の表示がやっかいになる。

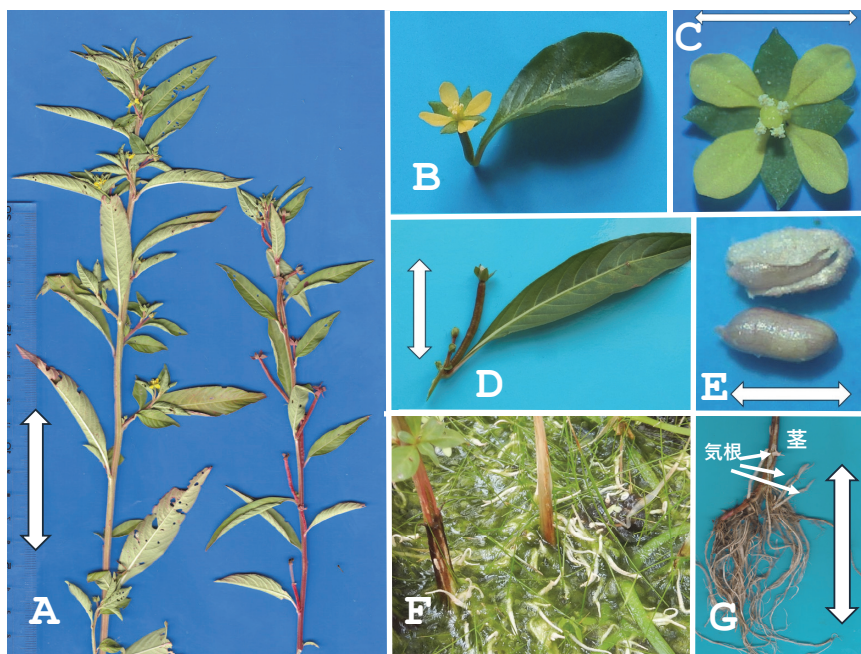


図-1 チョウジタデ (*Ludwigia epilobioides* Maxim.) の主要部位の形態
A: 花と果実をつけた茎の上部 (スケール: 5cm), B: 葉腋に着く花, C: 4弁の花 (同: 5mm), D: 未熟なさく果 (同: 3cm), E: 内果皮に包まれた種子と取り出した種子 (同: 1mm), F: 白色の気根, G: 株基部の気根 (同: 7cm)



図-2 除草剤処理された湛水直播水田に点々と残存したチョウジタデの幼植物



図-3 イネの生育後期の湛水直播水田におけるチョウジタデの状態
A：中・後期除草剤処理後のあと発生で生育の進まない状態，B：一発処理型除草剤処理後の残存個体（図-2）が成長・繁茂した状態（A, Bとも図-2とは別の地域・ほ場）

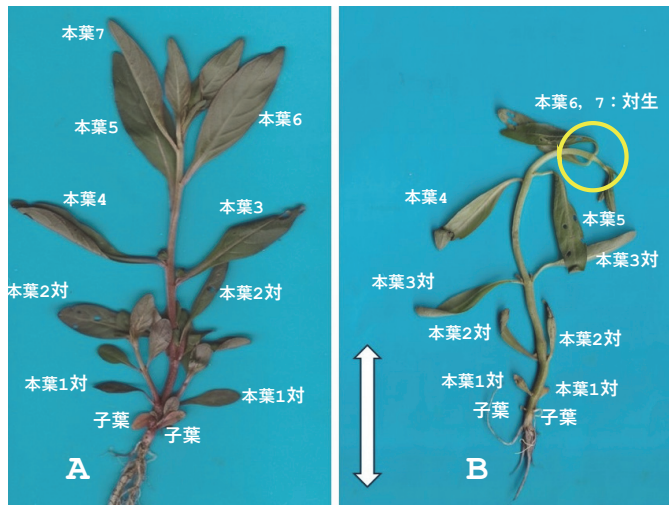


図-4 チョウジタデ実生苗の葉序

A：2対の対生葉の次から互生する個体，B：3対の対生葉の次から互生する個体（この個体では2枚の互生葉の次に再び対生葉）（スケール：3cm）



図-5 江戸時代後期に「タゴボウ」の名で図説されたチョウジタデ（飯沼慾齋「草木圖説 巻七」，1856-1861：国立国会図書館デジタルアーカイブ）

この植物が最初に図解された江戸時代後期の「飯沼慾齋 草木圖説，1856-1861」では「タゴボウ」の和名であり（図-5），明治時代になっても東京帝国大学の松村任三先生は「日本植物名彙，1884」から「帝國植物名鑑，1912」までの日本産植物リストで「タゴボウ チャウジタデ」と記されていた。明治の末になって「チャウジタデ タゴバウ（阪場清一郎「雑草」，1907）」や「ちやうじたで 一名 たごぼう（東京博物學研究會「植物圖鑑」，1908）」と、チョウジタデが主な名となり，その後「タゴボウ」の名は帰化種のヒレタゴボウ（*L. decurrens* Walter）に残った。

和名の「チョウジ」は，顕著な下位子房の花や果実に注目して，漢字の「丁」に見立てた（渡辺泰邦「広島県の植物方言と民俗」，2001，沼田・吉沢 前出 ほか）とか，香辛料の「チョ

ウジ（*Syzygium aromaticum* Merrill et Perry）：図-6）に似ている（阪場 前出，牧野富太郎「日本植物圖鑑」，1940，新潟日報事業社出版部編「新潟県野草図鑑（II）」，1982 ほか）ことによる呼称であるが，中には酒器の「お銚子」との説もある（新井・頸南地区理科教育センター「新井・頸南の野草」，1984）。香辛料のチョウジも，利用する花蕾を漢字の「丁」に見立てたと言われているので，同じ語源と言えよう。

方言名としては，アズキグサ（香川），トンガラシグサ（和歌山），ナンバングサ（新潟）（八坂書房編「日本植物方言集成」，2001），アカタデ・タデクサ（乙益正隆「熊本県植物方言と民俗」，1998）やジャクログサ（渡辺 前出）などがあり，いずれも秋期には紅紫色に紅葉する莖葉や果実に着目した命名である。ミソハギ科のホソバヒメミソハギも晩秋に紅葉するので，

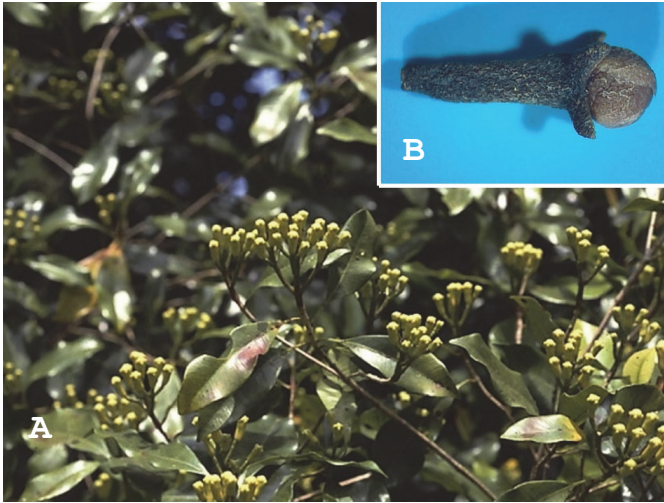


図-6 チョウジタデの和名の語源に関わるチョウジ (*Syzygium aromaticum* Merrill et Perry) の花序枝 (A:スリランカ中部) と乾燥した花蕾 (B:スリランカ産)

チョウジタデをホソバヒメミソハギと誤認することがある。一方長野県では、下記のように「大きなアブノメ」に見立てた方言名が記録された(宇都宮貞子「私の草木誌」, 1991)。

・「アサギは田の草取りにや手からこぼれる」といいながら、向こうの畦端から採って来てくれたのを見るとアブノメで、葉の脇の赤い小玉が花のようだった。こんなに小さくては全く手からこぼれる。またそこでオオアサギというのはチョウジタデで、畦ばかりか、チョロチョロ水の田の中にまでいくつも生えていた。これは別にアブノメに似てもいないのに、アサギの名なのはどういうわけか。(後略)

チョウジタデには、前出の「日本植物名彙」以来長年にわたって、*Ludwigia prostrata* Roxb. の学名が宛てられてきた(笠原前出, 沼田・吉沢 前出, 大滝末男・石戸 忠「日本水生植物図鑑」, 1980 ほか)が、染色体数 ($n=24$) や種子が内果皮 (endocarp) に包まれることで、インド、フィリッピン、中国南部に分布する *L. prostrata* とは別種の、ロシア、東アジアからベトナムにかけて分布する種として *L. epilobioides* Maxim. に整理された (W. L. Wagner *et al.* “Revised Classification of the *Onagraceae*” Systematic Bot. Monog. 83, 2007)。*L.*



図-7 チョウジタデの亜種ウスゲチョウジタデ (*subsp. greatrexii* (H. Hara) P. H. Raven) (スケール: 5cm)

prostrata をチョウジタデの異名 (シノニム) に使うのも不適當になる。

茎葉がほとんど紅紫色を帯びず、若い茎葉に微毛があり、花がややおおきい、ウスゲチョウジタデ (飯田華代 ウスゲチョウジタデ, 植調 50(11), 2017: 図-7) は亜種 *subsp. greatrexii* (H. Hara) P. H. Raven とされ、関東・北陸地方以西でしばしばチョウジタデと混生する。

日本にはヒレタゴボウの他にも、一年生でチョウジタデのように直立する *Ludwigia* 属植物が既に数種帰化していて、今後水田での本属雑草の状態が複雑になるおそれがある (N.R.Chandrasena *at al.* “From ‘Immigrants’ to ‘Invaders’? Old World *Ludwigia* species in the Asian - Pacific Region” Weeds - Journal of APWSS 7(2), 2025)。それに対応するためにもチョウジタデの個生態をしっかりと把握しておく必要があるように思う。

本種の分類についての文献をご紹介いただいた農研機構中日本農研の内野 彰氏にお礼申し上げます。